

Title	イリンチン先生を偲ぶ
Author(s)	杉山, 正明
Citation	内陸アジア言語の研究. 16 p.123-p.132
Issue Date	2001-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/15813
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イリンチン先生を偲ぶ

杉山正明

ふたりの泰斗の逝去

1999年2月10日、内蒙古大学教授で、モンゴル学の全般にわたってまさに泰斗というべき存在であったイリンチン先生が長逝された。享年68であった。

日ならずして、その報がわたくしのもとにも飛び込んできた。かねてより、体調がいまひとつだとは聞いていたが、まさかと耳を疑った。近々にイリンチン先生をある程度の長期で京都に招聘する計画をたて、先生にも許諾していたでいてからである。瞬間、さまざまなことが頭を駆けめぐった。だが、なによりも一代の碩学が世を去ったという事実、そして稀有の才・学・識は、おそらくはその1割ほどさえも文字化することのないまま、人をつつみこむようなあの温顔とともに、この世から永遠に失われたのだという想いが急に湧きあがってきた。おなじ学者の身として、ただひたすら、無念であった。——いま、それからすでに2年以上の歳月がすぎ、こうして筆を執っていても、その気持は強まりこそすれ、減じることはない。

ふりかえって、イリンチン先生の逝去よりほんの1ヶ月すこしまえ。同年1月7日には、名古屋商科大学教授・京都大学名誉教授の本田實信先生が他界されたばかりであった。享年75。まったくおもしろくない突然の逝去であった。

いうまでもなく、本田先生は日本にイラン・イスラーム原典文献による歴史研究の方法を本格導入され、ペルシア語と漢語の二大史料群を中心とする多言語原典史料の解析と、それにもとづくモンゴル時代史研究の道を開拓された方であった。やはり、文字どおり泰斗というべき人であった。

わずか1ヶ月あまりのうちに、モンゴル学・モンゴル時代史のふたりの泰斗

が、あいついで逝去したのであった。イリンチン先生の訃報は、二重・二倍の悲しみとなった。内外の関係する多くの人たちにとっても、そしてわたくしにとっても。

ところで、「ふたりの泰斗」というのは、ことばとして奇妙におもわれるかもしれない。しかし、それは幸運にも、このふたりの大先達に親炙することの多かったわたくしの率直な実感であった。数年まえ、時をえて、京都に来訪されたイリンチン先生に随伴して、上高野の本田先生のお宅にうかがった。両先生の歓談は、いつはてるともなく颯々と、静かにおだやかにつづいた。はじめて会ったのに、百年の知己とは、こういう間柄をいうのかもしれない……。

その時、わたくしの頭に「ふたりの泰斗」ということばが、ごく自然に浮かんできた。日本の本田、中国内蒙古のイリンチン。もとより、ともにそれぞれの国において、その道を領導する人である。つまりそれぞれが泰斗だが、さらに東の泰山に比すべきは本田、北の北斗にあたるのはイリンチン——。ふたりはまさに世界の泰斗なのだ、と。

モンゴル学・モンゴル時代史研究は、じつは世界・日本を問わず、ふ厚い伝統と蓄積がある。巨匠と呼べる人も、幾人も出現している。アジア史研究全体を見渡しても、屈指にすぐれた研究者を輩出してきた分野である。とくに、モンゴル世界帝国とその時代については、洋の東西に関連研究者が大きくひろがっている。そのなかで、高質の原典研究という点からいえば、20世紀後半において日本の本田、内蒙古のイリンチン、フランスのジャン・オバン、アメリカのクリーヴスが、他の方々とはすこしちがうところにいるのではないかと、わたくしは勝手におもってきた。これは、あくまで私見である。もとより、別の意見もあることだろう。

ところが、その4人は、ここ数年の間に次々とみまかった。その最後が、イリンチン先生であった。イリンチン先生の他界は、わたくしの目には、ひとつの時代が終わったことを意味するようにおもえる。それは、「英雄時代」の終わりのかもしれない。

簡潔・明瞭・本質を好む人

イリンチン先生は、1931年8月15日の生まれ。黒龍江省富裕県の人。富裕は、かのウリヤンカ三衛のうちの福餘衛の故地でもある。Yeke-mingyan 氏の出身で、先生みずから英文などでは Yeke-mingyatai Irinčin とわざわざ記されたりした。漢字では亦鄰真と書かれたが、ときに林沈とも記した。イリンチン先生の履歴・業績などの詳細は、5人の有力なお弟子さんたちの連名で『蒙古史研究』第6輯の冒頭に5頁にわたり、懇切な紹介・追悼の文章が掲載されており(斉木徳道爾吉・烏雲畢力格・宝音徳力根・白拉都格其・烏蘭「二十世紀蒙古学巨匠亦隣真教授」)、ここでは繰り返さず、あえてわたくしの目に映じたイリンチン先生の人と学問について以下に簡単に述べたい。

イリンチン先生がわたくしの論文を読まれているとの話は、たしか1983年、中国訪問旅行より帰国した若松寛教授(当時、京都府立大学。現、京都学園大学)からうかがったと記憶する。それが始まりだった。翌84年、なんとイリンチン先生がトブシン内蒙古大学副学長(当時)を団長とする学術交流訪日団の一員として、そのころわたくしが奉職していた京都大学人文科学研究所を訪問されたのである。クリーヴスがいるハーヴァード大学をはじめ、アメリカ各地を歴訪された帰路、立ち寄られたのだったが、イリンチン先生とお話するうち、すっかりその学殖・人柄に魅了されてしまった。「この人なら」とおもいたった。翌85年の秋、若松寛団長のもと、はじめて内蒙古に赴いた。1ヶ月の滞在中、先生と幾度も意見交換をおこなった。イリンチン先生と一緒に研究活動をしたい、との気持がつのった。そして86年、10ヶ月の暇を人文研からもらい、半分を中国、半分をヨーロッパですごした。中国での滞在先は、もちろん先生が所長を兼ねる内蒙古大学蒙古史研究所だった。

妻は生まれてはじめての海外滞在、4歳の息子は日本語もあやしかった。しかし、無上に楽しい滞在であった。イリンチン先生はもとより、トブシン・周清澍・葉新民をはじめとする蒙古史研究所のスタッフの方々、そして学生さんにいたるまで、とてもよくしていただいた。この場をお借りして、あらためて

心より深謝の微意を表したい。

イリンチン先生とは、昼といわず夜といわず、たえず討論しつづけた。とりあげる史料・テーマ・問題は、限りなくあった。先生は、まったく構えることなく、あけすけに「手のうち」をさらけだした。わたくしの方も、知りうる限りのささやかな知識で応じた。またとない至福のときであった。

ある晩、例によってイリンチン先生のお宅に参上し、二人で議論をしているところへ、お嬢さんのイルハンさんが顔をのぞかせた。医学専攻の大学生で、英語のトレーニングに励んでいる時期であり、われわれ二人が何語で話しているか、興味があったらしい。しばらく“傍聴”したあとニコニコして出ていかれたが、翌日イリンチン先生によれば、二人の会話は諸語の混淆で、妙な単語がどんどん飛びだし、それで通じあっているから本当におかしいとの感想だったそう。

ちなみに先生は、モンゴル語・漢語・日本語は生得のことばであるうえ、ロシア語・英語・チベット語は問題なく、仏・独・ラテン・トルコ・ペルシアの諸語も確実に読めた。もちろん、「読む」という点でならば、無類の言語学者にして古典学者であり、“胡漢”を問わず、おそるべき読解力と解析力を発揮した。くわえて、歴史学者としてのセンス・目線・洞察力も頭抜けたものがあったから、文献から史実にいたる万般にわたって、ゆくとして可ならざるはなき学者であったといっている。蒙古史研究所の一室には、モンゴル学・モンゴル時代史にかかわる先人として、錢大昕・バルトリド・ペリオらの肖像が掲げられていた。イリンチン先生ならではの面々であった。

先生は、率直・簡明を好まれた。博引旁証を評価されはしたが、旁証のための旁証や、博識を誇らんがための長大な注記は嫌われた。事柄の要点・本質をつき、結論を簡潔・明瞭にうちだせば十分と考え、みずからの論文では禁欲にすぎほどの姿勢を貫いた。その結果、残された著作・論述は、いずれも珠玉のような名篇ばかりだが、それにしても先生の実力・学識に比して、あまりにも数すくない。『元朝秘史』の漢語訳、『元典章』の訳注・研究、カラ・ホト出土

ウイグル文字モンゴル文書の研究が未完に終わったのは、まことに残念である。

このたび、イリンチン先生への追悼の意をこめて、本誌に2篇の論文の日本語訳を掲載させていただけることになった。特段の御高配に衷心から感謝の意を表したい。2篇ともに、近年わが国で研究熱が高まっているモンゴル時代発令文とモンゴル語直訳体白話風漢文にかかわる基本論文である。その完訳の提供と、それによる確実な知見の普及は、十分に意義あることと考える。

イリンチン論文日本語訳解説

本誌に掲載される2篇のイリンチン論文の日本語訳に先立ち、いくつかのコメントを附したい。

訳者の加藤雄三氏は、京都大学法学部・同大学院法学研究科の出身で、中国法制史・文化史を主な研究テーマとする。わたくしの『元典章』演習に出席したことが機縁となり、来日中のイリンチン先生と京都で会い、さらに北京の社会科学院歴史研究所の陳高華氏のもとで1年間の研修生活を送ったさい、上都遺趾での蒙古史学会にてイリンチン先生と再会し知遇をえた。このたびの日本語訳については、生前のイリンチン先生から許諾をうけている。

さて、まず「1276年龍門禹王廟パスバ字令旨碑を読む——ニコラス・ポツペ訳注の書評を兼ねて——」について、現時点で最低限必要とおもわれることを述べる。加藤氏によって以下に訳出された論文は、『内蒙古大学学报(社会科学)』1963年1期、pp. 113-123に掲載されたものである。そののち、随分と時をへて、『蒙古史論文選集4』(内蒙古大学学报叢刊) pp. 359-381に再録された。この選集には、刊行年がしるされておらず、いつの出版か曖昧ないい方にならざるをえないのだが、すくなくともわたくしは1985年に内蒙古大学蒙古史研究所を訪問したさい、ハード・カヴァーの美麗な体裁のものをプレゼントされた。ちなみに、翌86年に長期滞在したさいには、書店で廉価の平装版が売られていたから、前者は贈呈用だったのかもしれない。ともかく、ようするにこの

論文については、1963年の原載と、1985年にはすでに存在していた再録と、おそらくは20年ほどの歳月をへだてた2種があることになる。

ところが、原載と再録では、内容にかなり違いがある。原載では、ポッペに対するやや過激ともいえるほどの批判の姿勢・口調で貫かれていることが印象ぶかい。それが、のちの再録版になると、激しい表現は随分とやわらいで、おだやかないい回しにあらためられている。

今回の日本語訳にあたり、原載と再録のどちらに拠るべきか、加藤氏と相談し、わたくしの判断で原載を採った。したがって、原載を選択したことにとまなう責めは、ひとえにわたくしにある。

イリンチン先生自身が、20年ほどのちの再録にあたって修正しているわけだから、それこそが最終決定版だという考えも、もちろんあるだろう。また、ポッペも、イリンチン先生も、ともに道山に帰したいまとなつては、激烈な批判の展開する原載ヴァージョンを転訳するのは、はたしてどうか、という考えもあることだろう。しかし、そうしたことを承知のうえで、あえて原載を選んだのには、いくつか理由がある。

まず、1963年という時点で書かれたこと、そのこと自体になによりも意味があると考ええる。原載が公刊されたとき、イリンチン先生は32歳。たしかに、血気にはやったともみえる文脈もある。しかし、そうした「マイナス面」もふくめて、一代の碩学の若き日の論著として、後進のわれわれは熟読すればいい。情熱と迫力は、原載にこそ溢れている。本訳稿では、単純な誤植のみ再録版に従って訂正した。

1963年といえば、世界はどんな状況にあったのだろうか。当時の中国は、ありていにいえば、国家ぐるみで、ほとんど「鎖国」にちかい状態にいた。学術研究の諸分野もまた、そうであった。そのなかでの著作であることに、われわれは想いをいたす必要がある。資料・情報・交流の便など、すべてに恵まれた現在の日本とは、全然ちがうのである。

そうしたころ、日本もふくめて、世界のモンゴル学界は、ポッペを権威と

し、彼の主張を多くはそのまま鵜呑みにしていた。そこへ、中国内蒙古の若いモンゴル人学者が、真正面から批判と訂正をこころみたのであった。きちんとした根拠と、ほとんどが正鵠を射た指摘、深く鋭い洞察・見解——ポッペとはくらべようもない高水準であった。ときに、筆が走りすぎることがあっても、仕方がないだろう。それをこえて、あまりあるほどの大きなプラスが、この論文にはある。

1963年のイリンチン論文によって、研究レベルは一気にあがった。モンゴル語研究においても、漢語研究においても、元代歴史研究においても、波及する分野は、複数にわたった。1963年は、元代の言語・文献・歴史研究のひとつの画期とさえいいいいと、わたくしはひそかに考えている。さらに、この論文は、イリンチンという個人をこえて、中国・日本・世界の関連学界について、ある種、「時代の証言」ともいえる側面もあるのではないか。

以上のことから、1963年の原載こそ、日本語に翻訳して、より多くの関連分野のかたがたに読んでいただくのにふさわしいと考える。それに、1963年の『内蒙古大学学报(社会科学)』そのものが稀少である。再録版で読まれた人はある程度いるだろうが、原載版を通読したという話は、じつはほとんど耳にしない。おそらくは、多くの人は原載版を知らない。日本語訳を通して、イリンチン先生の研究成果が、研究史上における格別の意義とともに、再認識いただけるならば幸いというほかはない。

なお、現在の知見からすれば、訂正すべき点もなくはない。だが、それはたいてい近年の新出史料によるものであって、イリンチン論文の価値はほとんど減じていない。むしろ、現在の一線の研究者でも十分に気づいていない指摘や解釈もかなりある。日本語訳が学界に裨益することは疑いない。

つぎに、「元代直訳公文書の文体」について、『元史論叢』第1輯に掲載されたこの論文は、1982年の公刊であるから、イリンチン先生が51歳のときである。おそらくは、すでに『元典章』の訳註・研究を“公務”として割りあてられた著者が、その成果の一端を披瀝したものであろう。

これも推測の域をでないが、『元典章』をはじめ、諸書に類出するいわゆるモンゴル語直訳体白話風漢文の文章は、中国の元代史研究者にとっても、やはり厄介な代物で、漢語・モンゴル語に精通するイリンチン先生に簡便な手引きと
いうか、入門・解説文をもとめたのではないか。このテーマについて、イリンチン先生は余人の追隨を許さない突出した学者であり、そのエッセンスをコンパクトに学習できる本論文は、まことに有用である。

これに関連した日本人学者の仕事としては、昨年 2000 年 10 月に刊行された『田中謙二著作集』第 2 巻(汲古書院)に、「元典章文書の研究」が収録されている。183 頁にも及ぶ長大な解説・研究で、田中氏の長年の苦闘の成果が盛られている。心からの敬意を表したい。日本人の初学者には大変便利なものだが、ただその一方、内容が盛り沢山で丁寧すぎるといったらよいのか、ある種の晦渋さ、繁鎖さ、さらにはときにゆらぎといった面も否めない。それは田中氏の尊敬すべき正直さの結果でもあり、いくらかのゆらぎめいた部分は、今後のわれわれ後進にゆだねられていると考える。

モンゴル語・漢語の連関や、公文書としての歴史学からの確実な理解などの点で、イリンチン論文は 20 年ちかいまの作品ではあるものの、頭抜けた安定感があり、信頼性はきわめて高い。まずは第 1 に参照・閲読すべきものである。日本の読者としては、イリンチン論文を熟読・玩味したうえで、おもむろに田中氏の長篇にチャレンジしたらどうか。そしてもし可能ならば、そののちもう一度、イリンチン論文に立ち帰って、委細を尽くして検討されたい。そうしたあかつきには、その精鍊さ、あるいは簡素さのなかの十全さに、驚くことになるだろう。

なお、いわゆるモンゴル語直訳体白話風漢文について、モンゴル語原文とのかかわりを否定するか、もしくは極小評価におさえたいらしいむきがある。漢学者・漢語学者の気分・心情として、わからなくはないが、それはやはり無理というものだろう。もう十数年もまえだが、イリンチン先生も、モンゴル語原文を踏まえ、その語順で直訳したものでも、いったん漢字・漢語におきかえら

れてしまえば、漢語としてわかるというか、読めてしまうものだよと、日本の高名な漢学者の論文を指さしながら、苦笑いされていた。直訳用の訳語として採用された白話風の漢語・術語そのものは、当時の「漢語」であるのは当然のことである。「漢語として読める」ということと、モンゴル語の原文はない、もしくは想定しないということとは、全然レベルのちがう話である。

ことの根本には、モンゴル世界帝国がある。その広大な領域では、画一化された文体・形式のモンゴル語による命令文が大カアンやモンゴル王族・諸侯・大官たちから発せられていた。このモンゴル命令文こそが、モンゴル時代の公文書のすべての法上の根源にある。元代中国における直訳体白話風漢文も、その大きな枠のなかに存在する。

じつは、モンゴル語原文とその直訳体ペルシア語という合璧文書もある。おなじく直訳体チュルク語、直訳体チベット語、直訳体アラビア語の各公文書も存在する。「直訳体」現象は、中国文化圏だけに限らないのだ。モンゴル時代のアジアの大半をおおう大きな歴史現象なのである。しかも、その影響・余波は、ロシアやアク・コユンル、カラ・コユンルをはじめ、オスマン帝国・ティムール帝国・ムガル帝国、さらには明清両帝国、そして高麗・李朝などにも及ぶ。

事実のほうが大きすぎて、文化圏・言語圏ごとに内むきになりがちな学界・研究者は、それぞれに都合のよいストーリーを設定する。漢学・漢語中心主義はわかるが、事実を率直に眺めないと虚構になりかねない。漢学者として、元代中国の公文書の世界に果敢に挑戦された田中謙二氏には、モンゴル語原文を想定しないとか、その存在を排除するなどという態度はまったくなかった。事実を事実として見つめ、龐大な文献・用例・文案を真正面から把握しようとされたからである。それにくらべ、勉強不足というか、頭が先行した議論は、いささかつらいものがある。

それとかなり目につくこととして、元代公文書における事務用語の把握と位置づけがきちんとなされていない。かつて、この種の文体をさして吏牘体とか

吏読とか総称したが、公文書のレベル、官庁どおしのやりとりの間の節略、それぞれの場合における個別のスタイル・形式など、さまざまな文書状態のものが重層構造をなして展開している。しかも、それらのおおもとのところに、モンゴル語の命令文とその直訳体の漢文がある。それを踏まえて最高級官庁から中級官庁、そして下級の事務処理部局にいたるまで、官庁レベルに応じた公文書・事務文書がピラミッド構造をつくっているのである。

そうしたことの解明は、今後の課題といわざるをえない。ただし、イリンチン先生自身は、かなりきっちりとわかっていた様子だったが、そのほとんどを文字にすることなく、われわれ後進に託されることになってしまったのは遺憾というよりほかはない。